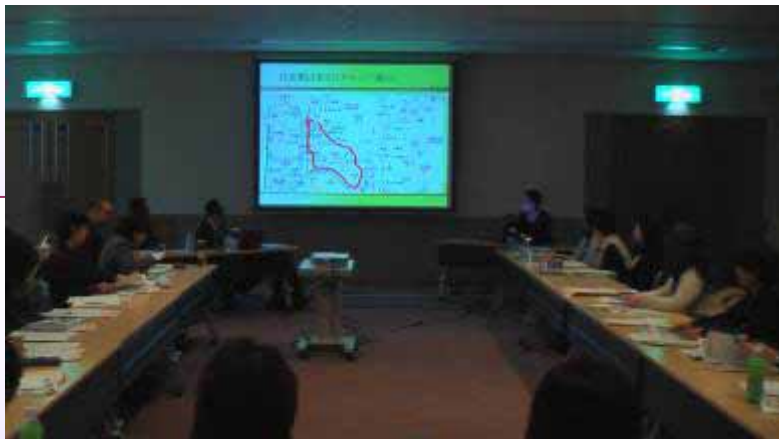


## つなぐ工夫

Q：みなさん、どんな工夫を？

- 包括、地域からの紹介が多いが、小規模につなぐときは、「お試し利用」を工夫している。



### • 照会経路

- 圏域のケアマネジャーから紹介。(しかし、それは居宅の件数が減るということ。その理解が難しかった)

- 認知症のどうしても難しい方を

引き受ける。それで「ありがとう」と。 法人の居宅で引き受ける。

法人の居宅から週

1 回程度の利用者を小規模多機能に。そういうふうにはバランスを取っていった。

- 事業所連絡会に説明に行く。

- ケアマネジャーから小規模に来るのは「難ケース」「コテコテのケース」

- しかし、そういう人ばかりでは、こちらも倒れてしまう。

- スタッフは「自分たちで支えないと行けない」という認識もって、踏ん張ろうと説明し、徐々に職員のレベルアップもしてきた。

- それをみて、他事業所のケアマネジャーも理解をしてくれていった。

- 同一法人の事業所から、ケースをもらったり。

- つなぎ...むずかしい。

- ショートの利用が必要な人。臨機応変に利用できる小規模はよい。

- 特養までのつなぎ。

- 伏見区は小規模多機能は多い。事業者連絡会で、丁寧に説明をしている。

- 当初は困難ケースが紹介された。

- 最近は「ぴんと来て」というケースが増えてきている。

- ケアマネジャーが「この人ならいけるかな？」と。

- つなぎ。軽度の方は一気に登録変更。重度の方はつなぎを1ヶ月くらいかける。

### • 「ぴんと来る」ケース

- すぐには通いに行けませんが、なじみの関係作りをしたら、通いにつなげられるかな？というケース。

- デイサービスで行動障害が多く、他の利用者からの苦情が多いケース。

- 最初是一对一の対応で、他の利用者の苦情、帰る行動がなくなったり。

- どういう利用者を対象と？

- 1 - 5で、在宅で生活を継続することが、その人らしい生活を継続することができるか。家族と両輪で支えていけること。

- ~~自分たちは、こういう方を、という意向を伝えている。~~

- 要介護1のケースが要支援になったときには...

- 利用すると、その後、要介護度の見直しをかけている。
- その方にとって、プラスになるかの見極めをしていき、契約に。
- 紹介してもらった事業所のリピーターが大切。ケアマネジャーにはその後を報告していくと、「こういう人が会っていたんだな」と

## 個別ケアと他の利用者とのバランス

- ケアの標準化

Q：「この方」に対する効果的なケアプランは？

Q：他の利用者とのバランスの取り方は？



## 収益性 / 人員配置

Q：収益的なところは？

松原のぞみの郷

月24名 約600～650万円の収入（30万ほどの収益）

家賃が大きい。（一人の常勤職員の給料に匹敵する）

スタート時は経験年数の高い職員で固めたが、うまくいかず。従来の発想から抜けなかったからかも。未経験の職員を育て、ゆくゆくは職員を調整し収益性も高めたい。

丹波橋の家

法人内の、サテライト施設、トータルで考える。

月24名 約400～450万円の収入

板橋の町家ほっこり

なかなか利用者が増えず、苦勞した。

サテライトは4ヶ所。

採算は取れていない。 地域に、理解してもらえたらいいかな？

サテライト全体で、少し黒字になっているか。

難ケースしか来なかった。

昨年から、やっと20名になってきた。（500～550万くらいの収入）

もみじの家

最初は3人、法人から移動（中堅1名、7～8年の経験者を2名）。あとは、新規雇用。

意識改革が難しかった。研修をやっていって、1年くらいで意識が変わってきた。

デイ、訪問介護のノウハウを持つ職員を核として、つくってきた。

認知症ケアをいかにするかが重要。最初はうまくいかなかったが、研修を重ねて、うまく対応できるようになってきた。（ex.60歳男性の受け入れも）

Q：人の配置は？

松原のぞみの郷は、「度外視」している？？

確かに職員配置は多い。未経験者が多く現状は育成中。将来的には見直しが必要と認識している。

## サービス内容

Q：サービスの内容は？

Q：訪問の割合は、どの程度？

## 町家

- 町家の改造を見て見たい。

## 地域との関係づくり

- 地域に根ざした感じが、感じ取れた。

Q：自治会にはどうして入る？

Q：ボランティアは、どうやって集めている？

Q：運営推進委員会は、どのように運営している？

- もみじの家
  - 東山区 社福法人が1ヶ所なので、名前は通っている。
  - 外に出て行くのは、内部でも抵抗があったが、外部の抵抗もあった。一軒一軒説明に回った。それで地域を知ることができた。
  - 運営推進会議 2ヶ月に1回（第二木曜19時～、地域の人に合わせて）
  - 社協会長、町内会長、地域のケアマネジャー（1年ずつ事業所を交代）、地域包括+お泊まりの利用者、ご家族など
  - 普通の近所つきあいをしている。（ex.来年は組長）
  - 一昔前の近所つきあい
  - 土筆を取ってきたといただいたら、炊いて、お裾分けを、等。
- 板橋の町家ほっこり
  - 当初は、地域からの反発があった。
  - 運営推進会議 民生委員、老人福祉員、学区社協、包括等 そこから地域の言葉をもらって、対応を考えている。
  - 保育園の子どもたちも来てくれるようになっている。
    - 利用者の顔が全然変わる。
      - 「来れる時間でいいので」とお願いし、ちょこちょこ来てもらっている。
  - 地藏盆を、1階の部屋を使って、等。

- 夏祭りは、小さい子どもも来てもらえるように。
- こちらから出て行くこともしていきたい。
- 防災訓練は、地域の方も一緒に。
- 丹波橋の家
  - 反対運動があった。小規模の説明会「福祉施設ができるのはありがたいが、私の家の隣はイヤ」と。何度も町内会で説明した。
  - 運営推進会議にも参加してもらい、徐々に理解をしてもらっていった。
  - 3学区の民協、老人福祉員に入ってもらい、定例会で事例紹介等、定期的に3学区に説明に行く。そこから、計画作成担当者とのつながりができていく。
- 松原のぞみの郷
  - 商店街の中で、ということで大歓迎だった。
  - しかし、好意にどこまで甘えるのか、自覚を持たないといけない。本音はどうか？
  - 職員一人ひとりが「住まう感覚」を大切にしないといけないと、話してきた。
  - 近所とのつながりも、最初は挨拶から。
  - どういう仕事をしているのかをアピールしていかなければ。機関誌づくり(毎月発行 A4裏表) 何をやっているのかを、地域にアピール。
  - 家族にも理解を得て(家族会で話をして)。
  - 蔵の使用料は無料で開放・町内会会議や商店街主催のお茶会等に解放している。収益的な活動はできない。ただし『寄付』として受けている。

## 運営推進会議

- 松原のぞみの郷 2ヶ月に1回。6時半～8時。
  - 地域での取り組みを報告
  - 安心サポーター講座を開催。
  - 他の小規模多機能から、見学者に来てもらい、情報交換を。
  - 家族会を立ち上げる際にはエールをもらった。
  - 「どうやったら利用者が増えるか・宣伝の方法を教える」なども言ってもらったり。
  - 2ヶ月に1回。利用者、家族、民生委員、老人福祉員、区社協。
  - 利用者アンケートの内容を、メンバーで意見を出し合い、アンケートを作った。
  - 「しつらえ」をどうしたらいいかを、アイデアをもらったり。
  - 庭の手入れが大変といえば「なんとかしてあげようか」とボランティアで助けてもらったり。
- 板橋の町家ほっこり 2ヶ月に1回 5時～
  - 高齢の方ばかりで、なかなか話が進まない。お休みをされる人も多く、来年からは考えないと…。
  - 「協力してあげる」という声も言ってもらったり。
  - 地域の方が、この利用者さんで困っている、と言ってこられて、ではどうしたら？と考えていくようにできる。
  - ケアの中身のことを聞いてもらい、それを周りに説明して上げると言ってくれたり。
- もみじの家 1～1時間半
  - レジュメをつくる。利用者の様子を4 - 5行。
 レジュメは持ち帰り不可。ファイルして、毎回それを見ながら説明。

苦情、事故を報告。それについてどう思われるか、意見をいただく（第三者委員的役割）  
ビデオ上映。前回から今日までの行事、日常の様子等。

手作りおやつ再現をする。（実物を出す、召し上がってもらふ＝実感してもらふ）



## まとめ

今年 2 月に行われた近畿大会終了後、ジャンボタクシーにて京都の 4 か所（板橋の町家ほっこり・丹波橋の家・もみじの家・松原のぞみの郷）の小規模多機能施設を見学しました。21 名と言う限定ツアーでしたが、見学後各施設からの現状報告や質疑応答の座談会も充実した内容となりました。小規模多機能はどんな利用者がマッチングするのか。どんなふうに小規模多機能をアピールして利用者確保をして行けばいいのか、運営推会議の進め方や地域との付き合い方、他の小規模多機能がどんな工夫をしているのかなど、参加者の方はとても興味深く聞き入っておられました。実際に他の小規模多機能施設を見学して、その場の空気を感じることができることも、今回企画の魅力だったと思います。全国的にも認知症ケアの発信地として京都は注目をされています。

座長の花園大学・福富先生は「小規模多機能はオリジナリティを発揮できる多くの可能性を秘めたサービスと」コメントされました。健全運営のカギは登録者数とその要介護にあります。利用者側からも経営者側からもハードルは高いものになっています。しかし、小規模多機能のシステムには『とらわれの無い生活』の実践の可能性があります。介護支援専門員としても、『力まず・ありのままの・・・』を受け入れ、本来の暮らしのあり方や、人と人との関係を学べる場所でもあるでしょう。京都の小規模多機能型居宅介護は少しずつ増え、ちなみに現在 18 か所にのぼります。月一回福富先生をスーパーパイザーとして迎えるの事例検討会も 1 年目を迎えました。今後はその積み重ねを発表する場も持ちたいと考えています。働く場所はそれぞれ違って介護支援専門員が自らの持てる専門性を発揮できる場所に違いはなく、小規模多機能の介護支援専門員の、特有の悩みや専門性を語る場所を築き、形がないものだからこそからしなやかに形をかえられる、変化を見極めるセンスをともに磨いて行くはじめの一歩となるようなオプションとなったことでしょう。